“満洲国文学”に関する新資料解読

――『偽満時期文學作品叢書』全10冊を中心に――

李　　青

はじめに

2015年に『偽満時期文學作品叢書』第一輯・全10冊は内部資料として、吉林省図書館によって、整理・復刻された。印刷部数はわずかに500セットである。

吉林図書館は清末1909年に設立され、すでに100年以上の歴史を誇っている。重要な館蔵文献には古典籍、中華民国期の文献、満洲国（満洲国は1932年に日本の傀儡政権として建国された国である。中国ではこの政権の正当性を認めず、偽満洲国と称している。日本では多くの研究者は「」付きで満洲国の名称を使っている。本論では、便宜上、満洲国とする）時代の文献、建国前から保存していた日本語文献などが含まれている。新館の開館に際して、所蔵している時代を象徴する満洲国時代の作家の作品を選別した。そして、まず、10種類を満洲国時代の文学作品第一輯として出版することに決めた。これが本叢書である。楊慈灯、王秋蛍、呉玉瑛、範螢、山丁、梅娘、古丁、趙小松など８人の作品が含まれている。すでに孤本、珍本になっているものがあり、他の研究機関や民間で絶版となっているものがある。吉林省図書館は本叢書のあと書きで、「公共機関として、これらの資料を歴史の宝庫から世に送る責任がある。貴重な資料を通じて、あの特殊な時代に置かれた文学様態を感じ取ってもらい、暗夜に包まれた空に放つ異彩を見てもらい、岩石の重圧の下からの叫び声を聞いてもらいたいからである[(1)]」と、復刻版の出版に踏み出した意図を説明し

(1)『偽満時期文學作品叢書』后記
『偽満時期文學作品叢書』　吉林省図書館整理　あと書きはそれぞれの本の最後に付している。

た。

今回の復刻版は影印本であり、オリジナルのままの形態を保っている。長期にわたる保存のために、作品に使われた紙は無酸紙である。すべてハードカバーであり、サイズは32開（中国の本のサイズで、A５サイズの大きさ）である。

叢書の目録は本論の末尾に付しておく。

中国大陸では80年代から旧植民地文学を見直す動きが見られた。初期の段階では蕭軍や蕭紅のような抗日戦争が勃発して間もない頃に関内に逃れた作家達の抗日傾向の強い作品がいち早く認められ、再版されるようになった。しかし、日本占領地域、特に満洲国内にとどまり、文学活動を継続していた作家達は依然として対日協力者漢奸文人というレッテルを貼られ、批判され続けていた。再評価作業は1990年代の後半からゆっくりと進められ、2000年以後になると、研究の自由と幅にかなり改善が見られるようになった。これまで評価されなかった作家や作品が注目を浴びるようになった。

旧満洲の東北地方の図書館は満洲国時代に残された書籍等を整理する一連の動きのなかで、植民地の文学を再評価する機運にも乗り、これまでに封印されてきた文学作品を部分的に段階的に再版し、一般の読者や研究者の便宜を図ったのだった。植民地研究ブームにまで発展したものの、植民地文学の出版物から見られる作品は中国に特有の文学と政治の関係によって、部分的な文言の書き換えやワンシーンのカットなどが散見された。例えば、梅娘研究においては、初出作品再版の際に発生する書き換えによって、研究者の間に物議を醸している。張童「女性言説的“失語”――梅娘の『蟹』版本変遷を例にして」（『南方論叢』2012年第６期　75頁-80頁）はその一例である。著者は新中国（1949年以後の中国を指す）成立後に二度にわたって出版された梅娘の『蟹』を版本の変遷をたどった。歴史的経緯を追いながら、女性作家に置かれた言語環境を分析している。

今回の『偽満時期文學作品叢書』の出版は原作にまったく手を加えず、原版のままの複写となっているのが特色である。もう一つの特色は、これまでは満洲国軍人による創作は文学から外されていた。満洲国軍人は日本軍に協力している存在であり、「偽軍」と言われ、否定の対象となっていたからである。勿論、そこから生み出される文学（小説、散文、日記）は完全に度外視

されてきた。今回の作品に軍人作家楊慈燈の作品が入っていることは、実に意外で驚喜に近い。満洲国に発生した文学を考察するには、良い材料である。政治に左右されることがなく、ありのままの満洲国時代の文学に触れられることは画期的なことだと言わざるをえない。

まず最初に、『偽満時期文學作品叢書』各巻について、著者と内容を簡単に紹介する。その次に、日本における満洲国文学研究者岡田英樹の最新の満洲文学の翻訳書について紹介する。

一　『偽満時期文學作品叢書』第一輯（全10冊）

『偽満時期文学作品叢書之一』には、山丁『豊年』（民国33〈1944〉年６月）新民印書館の新進作家集・第七集としての短編集、９編が収録されている。

山丁（1914-1997年）は満洲国時代にもっとも活躍していた作家である。同人誌『文選』のメンバーであり、「文選派」の作家とも言われている。当時の満洲文壇において、「郷土文学」の提唱者として注目を集め、自らの作品をもって、満洲の大地を題材として、創作してきた。文学史では、満洲文壇の「郷土文学」の旗手と賞賛されている。長編小説『緑色的谷』（1943年　文化社）を発表することにより、作品の一部は削除処分を受けた。内容的に「反満抗日」の傾向が強いため、当局の監視と取り締まりが強まる中、ついに1943年に北平（北京）へと脱出した。

本復刻シリーズの第一冊目として登場した『豊年』はこうした背景のもとで、上梓したのである。山丁はあと書に自分の心情を綴っていた。[2]

> 昨年の冬に私が北平に来てから、ある友人に新進作家集から一冊出すようにと催された。私は「新進」の意義がすこぶる好きであり、快く承諾した。
>
> この本には私の最新の作品が収録されている。いわゆる最新というのは、昨年来書いた発表したものと未発表したものを指す。字数不足のために、四年前に書いた長めのものも入れた。その中の一編の題を小説集の題目にした。（中略）原稿は故郷から郵送してもらった。このあと書

(2)　吉林省図書館整理　『偽満時期文學作品叢書之一』　189頁。

きを書いている時に、本の出版を唆してくれた友人はやってきた。世の中にこのような偶然があることをうれしく思う。彼に「人は理想を喪失したときに“偶然”なことが暖かさをもたらしてくれることがある」と言った。この本は偶然の中で出版することになる。このように偶然な形でまた出版するかもしれない。

『豊年』に収録された9編のうち、8編は満洲国を題材にし、下層社会の人々の日常を描いたものである。満洲当局に目をつけられた後、山丁の作品であるゆえに、発禁処分になる可能性があった。北平に逃れる幸運に恵まれ、このような“偶然”な形で多くの読者の目に触れることができ、“偶然”に良いと感じたのであろう。

タイトルとして選ばれた『豊年』は、豊作後に地主の家で豪勢なご馳走を用意し、お祝いをする。このめでたいはずの日に地主の家に小作人の男が報酬の未払い金を取り立てにきた。作者は意図的に豊作はかならずしもすべての人にとって、喜ぶべきことではないことが書きたかったのであろう。

『偽満時期文学作品叢書之二』　古丁『新生』（康徳11〈1944〉年12月）藝文書房版　長編小説。

古丁（1916-1964年）は満洲国時代にもっとも重要な作家である。作品の数にしても質にしても満洲国を代表している作家と言っても過言ではない。日本語にも精通しており、創作活動以外に、翻訳にも手がけていた。

長編小説『新生』のあらすじを見よう。新京は1943年にペストが流行り、緊急事態となった。疫病の多発地域は隔離されることになる。古丁の実家はこの地域に当たり、家族とともに隔離地域に引っ越すこととなる。小説は大きな起伏もなく、隔離地域に滞在している間に、隔離地域にいる人々の人間模様や出来事を淡々と描いたものである。疫病の詳細が外部に伝わらない当時の状況では新鮮に感じられ、当時の疫病対策、人々の生き方を垣間見ることができる。

『偽満時期文学作品叢書之三』　梅娘『魚』（民国32〈1943〉年6月）新民印書館の新進作家集　第二集としての短編集である。6編が収録されている。

梅娘（1916-2013年）は満洲国時代及び華北地方の女性作家として有名である。1937年に日本へ留学し、1942年に帰国してから、北京を拠点にして文学活動した。ここで発表される６編は1941年―1942年の作品である。梅娘は一貫して女性問題、児童問題に気を配っている。タイトルにもなっている小説『魚』は女性主人公の独白を通じて、婚姻生活が置かれている苦悩、愛情への憧れを現している。女性の内面を赤裸々に剝き出し、女性にまつわる恋愛、結婚、結婚生活、不倫などのような問題をうまく扱ったゆえに、８回も再版するほどの大反響であった。

『偽満時期文学作品叢書之四』　慈燈『老総短編集』（康徳９〈1941〉年11月）　藝文書房44編が収録されている。

慈燈の本名は楊慈燈である。1915年山東省胶東平原の農民の家庭に生まれ、1996年没した。20歳にならないうちに、満洲国の軍官学校を卒業し、一番若い将校となった。

筆者はこれまで楊慈燈に関する研究にはあまり関心を向けることができなかったが、作品の発見や復刻に伴い、作家楊慈燈の存在はより身近に感じられるようになった。特に軍旅生活についての作品が多く読めるようになった点は、今後の研究内容をさらに広げてくれたと言える。

楊慈燈は1931年から創作をはじめ、1945年まで短編集の作品を多数発表した。童話作品集に『月宮里的風波』、『童話之夜』があり、自らの軍旅生活を題材にした『老総短編集』などがある。

『老総短編集』にある第一編の『山中』は、命令文を部隊長に届けるたに、山々の間を馬を引き連れ、行軍する苦労を描いている。兵士の足となる馬についての描写はきめ細かく、リアルである。

『激烈的戦闘』は戦場の肉薄の場面を描いた作品である。こちらも兵士が命令文を届けに行く途中で、何者かに襲撃された。馬が負傷しながら、駐屯地に狂奔したおかげで、馬の背にいた戦士が一命を取りとめた。命拾いした戦士の情報によると、20数名の「匪賊」に遭遇したという。この後、部隊と「匪賊」との間で熾烈な肉薄戦が繰り広げられる。血なまぐさい戦場の悲惨さが感じ取れる一編である。

数少ない軍旅生活を題材にした作家ならではの描写は、当時の満洲国軍の

実態を垣間見ることができる恰好の材料であろう。

2015年、遼寧人民出版社から『楊慈燈文集』（上・中・下）が出版された。息子の夏正社が纏められた文集である。半世紀以上埋もれていた作品や作家が正当に評価されるきっかけになった。

『偽満時期文学作品叢書之五』　呉瑛『両極』（康徳6〈1938〉年10月）益智書房　文藝叢刊第四輯12編が収録されている。

呉瑛は梅娘と並び満洲文壇の才媛だった。日本留学や北京滞在など外地で活動していた梅娘と比較して、呉瑛は満洲国に滞在する時間がもっとも長い女性作家である。呉瑛は満洲族の名門出身である。1939年10月に、小説集『両極』を出版後、さっそく大きな反響を呼び、第一版は2000部を印刷し、第一回の文選賞を受賞した。小説は女性の細やかさから、鋭い目線で社会を観察している。

小説『両極』は主人公張六奶奶の一生を描いた作品である。張六奶奶は17歳の時に張六爺と結婚し、一年後に夫が亡くなった。18歳から未亡人となった。以来、夫が残したわずかな貯金でやりくりしながら、家を守り、夫の両親を看取った。彼女の「貞節と孝行」に対しては、社会から賞賛されたばかりでなく、彼女自身も誇りに思っており、これが運命だと受け止めていた。封建的な礼教に縛られる覚醒しない女の一生を皮肉っぽく描いた作品である。

『偽満時期文学作品叢書之六』秋蛍『去故集』（康徳7〈1939〉年12月）益智書房　文藝叢刊第五輯9編が収録されている。

秋螢または王秋螢（1923-1994年）ともいう。遼寧省撫順県生まれ。ペンネームを多く使っていた。満洲国時代の重要な作家の一人である。1939年、奉天で文選刊行会が結成されてから、メンバーとして活躍していた。彼の作品には文学史の記述が多く見られるほか、文学作品も多い。長編小説には『河流的底層』、短編小説集には『小工車』、『去故集』などがある。

『去故集』に収録された「鉱坑」を見てみよう。41歳の炭鉱夫張斌は妻と2人の子供を連れて、炭鉱場できつい労働を強いられている。けがをしていた娘の治療費を払えず盗窃に走る。監獄に入れられてから、病死している。残されてしまった若き妻は生活のために炭鉱場の管理人に身を任せるしかな

かった。炭鉱夫の悲惨な一生を描いた作品である。

『偽満時期文学作品叢書之七』　小松『野葡萄』（康徳10〈1942〉年２月）藝文書房　駱駝文学叢書シリーズとして出版されている。中編小説３編が収録されている。

小松（1912―不詳）も満洲国時代の重要な作家の一人である。遼寧省生まれ。小松は一番多く使われているペンネームの一つであり、ほかに孟原、夢園、白野月、MY などがある。1938年から満洲国終焉まで『人和人們』、『蝙蝠』など７つの作品を世に送った。

『偽満時期文学作品叢書之八』　梅娘『蟹』（民国33〈1944〉年10月）華北文化書局　華北文藝叢書之五６編が収録されている。

今回のシリーズでは梅娘の作品だけ二冊復刻した。『蟹』は第三回大東亜文学副賞受賞作である。

作品は梅娘の実家をモデルにして、その発展過程を書いた自伝的な作品である。大家族の三代にわたるロングドラマティック的なストーリーを展開させながら、様々な人間模様を登場させることによって、人間の魂を剝き出す佳作である。

作品に日本人「小田先生」が登場する。家族と日本人との関係を暗示していた。けれども、新中国になってから、この部分は政治的な理由で書き換えたため、小説の趣旨が微妙に変化した。今回の復刻によって、最初の風貌が再現され、研究者や梅娘ファンにとっては、本来の作品に触れることができた。

『偽満時期文学作品叢書之九』　羅曼情熱小説集『再恋曲』（康徳11〈1943〉年８月）満洲雑誌社　麒麟文庫として刊行。10人の作家による10編の短編が収録されている。

第一編の範瑩（生卒年不詳）『北地恋歌』の作品を見てみよう。

妻子のある李霞がＨ市へ用事で行く。主人公のロシア人や町の風景などからＨ市が哈爾浜であることは間違いないと推定できる。当時はロシア革命から哈爾浜に亡命してきた貴族が多く住んでいた。李霞は若き時に結婚し、

妻との間に可愛い息子がいる。しかし、妻に未練のない李霞はたちまち下宿先のロシア人の娘と恋に落ちた。やがて、息子危篤の電報が舞い込んできた。熱愛しているロシア人女性に数日で戻ってくることを約束した。ところが、家に駆けつけた李霞は息子の死に目に会えなかった。傷心しきっている妻を慰めるために、ロシア人女性との約束を破り、家に長く滞在した。しばらくしてからH市に戻ってみると、ロシア娘は愛する人を思うあまり、憂鬱の中で世を去ってしまっていた。

当時の知識人の恋の悩みを主題とする小説であり、意味深い。妻との結婚は幼い時に決められた婚姻であり、心の通わす愛情が欠けていた。夫婦は一人息子の存在で辛うじてつなげられているだけだった。しかし一方で、ロシア人娘との愛情はお互いに愉快な時間、空間を共有し、幸福なものだと描写している。伝統的な婚姻観との葛藤がリアルに描かれた一作であろう。

『偽満時期文学作品叢書之十』爵青『帰郷』（康徳10〈1942〉年11月）藝文書房　駱駝文学叢書シリーズとして出版されている。短編小説7編が収録されている。

爵青（1917-1962年）は、本名劉佩、満洲国の最重要作家の一人である。幼少時代から聡明で、勉強好きであった。日本公学堂、交通学校などを卒業してから、鉄道局に務める。文学好きな爵青は1939年に藝文志事務会に入り、満洲国時代における「藝文志」派の主要メンバーとして大活躍していた。作品数は多い。1943年出版の小説集『帰郷』をはじめ、長編小説『黄金的窄』『青服的民族』『麦』がある。中編『欧陽家的人們』が1942年「盛京時報文学賞」を『黄金的窄』が大東亜文学賞を受賞した。『麦』は文話会作品賞を受賞した。

『香妃』をピックアップして見てみよう。初出は1943年2月15日の『華文毎日』である。歴史短編小説である。清朝乾隆26（1761）年に香妃は中国西部のウイグル族・ホージャ氏の娘で1734年頃誕生し、成長したのちウイグル族の長ホージ・ハーンのもとに嫁いだとされている。香妃は体から不思議ななんとも言えぬ甘い香りがしたため、香妃と呼ばれてるようになったという。しかし清王朝がジュンガルを陥落させたときに夫は戦死し未亡人になってしまう。さらに香妃は捕らえられ北京へと連れていかれ、紫禁城で皇帝の前に

突き出され、その姿を見た乾隆帝は彼女の美しさに心を奪われてしまう。故郷へ帰りたいあまりに泣く妃に対して、乾隆帝は、紫禁城の中にウイグル式の宮殿を建ててあげると引き留めるが、香妃は前夫への貞節を守り寵愛を受けいれなかった。

異民族に占領されている1943年の満洲国で生活している著者の爵青を考えると、歴史の伝説を小説を通じて、何かを発信しようとしているのかもしれない。

以上簡単に見てきたように、『偽満時期文學作品叢書』第一輯（全10冊）の作品群は実に多彩である。編集者はさぞかし熟慮した上での選択編集だったと思う。派閥や政治主張、などを乗り越え、満洲国時代に活躍した作家の作品を網羅している。内容的に従来のはっきりとした「反満抗日」の作品しか選抜しない方法を避け、その時代を物語る作品を蒐集した。第４輯と第９輯はこれまでにまったく見ることができなかった作品である。内容的にもこれまでのイデオロギーに相反するようにも感じられる。これまで抗日の文字しか見ることができなかった時代の研究はやはり偏りがあった。史実に基づく研究が軌道に乗ったことは、喜ばしい。満洲国時代を多角度から考察するのは、新鮮な貴重な資料と言えよう。

今後は整理と発掘作業とともに、『偽満時期文學作品叢書』第二輯の上梓を期待したい。ここで『偽満時期文學作品叢書』第一輯（全10冊）のリストを整理し、読者に呈する。末尾の参考資料は作品リストである。作品を通じて、70年前の満洲国時代を再確認してほしい。

二　岡田英樹 訳編『血の報復』
――「在満」中国人作家短篇集について

2016年７月にゆまに書房から満洲国文学研究の第一人者である岡田英樹・訳編『血の報復』―「在満」中国人作家短篇集が出版された。

著者は学会誌『植民地文化研究』（2001年創刊）に設けた「「満洲国」時代の中国人作家の創作」を担当し、中国語の作品を翻訳してきた。岡田は数十年来一貫して、満洲国時代に活躍していた中国人の文学を追ってきた。研究論文をはじめ、翻訳も多く、先駆的な研究成果[(3)]を出している。

本書は以上のような地道な研究成果の一部である翻訳集である。著者は翻訳に選んだ作品についてこう語っている。「初出版をテキストにすること、初訳であること、多くの作家を紹介するため一人一作品とすること、などを考慮した[(4)]」。いずれも、岡田英樹による初訳であることが分かる。

選択された作品は以下の通りである。

血の報復（中国語原題：血債）　王秋螢
本のはなし（中国語原題：書的故事）　舒柯（王秋螢）
ユスラウメの花（中国語原題：山丁花）　疑遅
山海外経（中国語原題：山海外経）　古丁
臭い排気ガスのなかで（中国語原題：臭霧中）　山丁
荒野を開拓した人たち（中国語原題：拓荒者）　山丁
掌篇小説（ミニ小説―筆者注）三篇
・風―わが母にささげる　・柴を刈る女―愛する楚瑚にささげる
・忽瑪河の夜
（中国語原題：・風　・砍柴婦　・忽瑪河之夜）
但娣
放牧地にて（中国語原題：在牧場上）　磊磊生
十日間（中国語原題：十天）　袁犀
ある街の一夜（中国語原題：某城某夜）　関沫南

---

(3) ①『文学に見る「満洲国」の位相』研文出版　2000年
②『続　文学に見る「満洲国」の位相』　研文出版　2013年
①は「満洲国における文学」、「満洲国における中国文学の諸相」、「外からみた満洲国の文学」の三大部分からなっている。満洲文学の位置づけから、著者が長年従事してきた中国人作家の諸相を述べた。なお、満洲国内部の文学と外部世界との関わりを特定な人物と日本が当時組織していた大東亜文学者大会などの事象を通じて、その本質に迫った。
②では同じく三大部分からなっている。「古丁論再攷」、「作家論」、「資料が語る「文学」の諸相」である。古丁研究は著者の一貫してきた研究テーマである。「古丁論再攷」では古丁の詩集や親日的な作品を対象にしている。満洲国内でもっとも複雑な存在である古丁論を多角度から論じる。作家論においては、①で十分に触れなかった作家について、詳しく論を展開し論じた。「資料が語る「文学」の諸相」中では、満洲国時代にあった新聞、雑誌及び様々な資料を題材に、文人との関わり、文学の諸相を著者独自の見解を述べた。
以上の二点は岡田英樹が一貫して研究してきた満洲文学の集大成であり、満洲国文学の諸要素を総まとめした力作であり、学術的価値が極めて高い。
(4)岡田英樹 訳編『血の報復―「在満」中国人作家短編集』（ゆまに書房　2015年）７頁。

河面の秋（中国語原題：江上之秋）　田兵
香妃（中国語原題：香妃）　爵青

上記のように、当時満洲文壇に活躍していた中国人作家の作品を集めている。文学のあり方、人生観の違いを乗り越え、バランスの良い作品選択である。満洲国が成立したのが、1932年であり、今年で84年もの歳月が流れた。翻訳者の言葉を借りれば、「異民族の支配下で、憤怒と苦悩を呑み込みながら、生活を送っていた中国人作家の目線から、もう一度「満洲国」を検証する必要は認められるであろう[(5)]」と。

作品の原文はその時代の中国語の制約もあり、そのまま理解するには、難解な語彙、言い回しがある。しかし、訳語はこのようなところを見事に現代日本語に的確に訳し、誰が読んでも理解できるように言葉に工夫を凝らしている。専門用語、特別な語彙などについては、注も丁寧につけた。何よりも各編の後に必ず「作品解説」がある。作品についての詳細な紹介及び訳者の作品に関する理解などをつづっている。たとえ満洲国時代の作品に不案内な読者でも、「作品解説」を読むことによって、作品に対する理解が深められるだろう。訳者の岡田英樹の長年にわたり、培われた満洲文学に関する鋭い洞察力による明快な解説が満洲文学のガイドになるにちがいない。

おわりに

近年は旧満洲の中国東北地方の档案館や図書館が中心になって、満洲国時代の資料の整理に精を出している。これまでに政治的な原因で開封すらできなかった危険視された書物は有識者などによる配慮の下、図書館から研究者向けに内部資料として発行されている。民間では絶版となっているものや、なかなか手に入らない珍版も含まれている。特に、これまでにまったく注目されなかった無名作家の作品も、埋もれている倉庫から日の眼を見るようになってきている。研究の幅を広げる良いニュースである。なお、日本国内においても、研究論文や研究書が多く世に問われると同時に、満洲国時代の文学作品も翻訳され、研究環境がいっそう充実するものとなった。筆者は近年

(5) 注3と同じ。8頁。

新しく発見した資料に基づき、満洲国時代に軍人が書き残した資料に当たりながら、満洲国の別顔を考察中である。拙稿「ある「満洲国」軍官の日記『轍印深深』」(『文藝論叢』第83号　2014年)、「『轍印深深』—ある満洲国軍官の日記に現れた恋文について—」(『文藝論叢』第83号　2015年)は新資料に基づく成果である。今後は『偽満時期文学作品叢書之四』慈燈『老総短編集』を題材に軍旅作家が描いた満洲国もあわせて、見つめていきたいと考えている。

今後も継続されるであろう資料の開示によって、作品を比較分析するような一歩進んだ研究が期待される。

テキスト：

吉林省図書館　整理　『偽満時期文學作品叢書』　全10冊　2015年収録

作品リスト：

偽滿時期文學作品叢書之一

豐年　山丁

目次

豐年　三
殘缺者　一九
一個喜歡故事的人　三一
賭徒的經典　四七
朋友　六九
金山堡的人們　七七
祭獻　一一七
在土爾池哈小鎮上　一四五
北京　一六七
後記　一八九

偽滿時期文學作品叢書之二

新生　古丁

偽滿時期文學作品叢書之三

魚　梅娘

目次

侏儒　一
魚　二七

旅　七五
黃昏之獻　八三
雨夜　一〇一
一個蚌　一二五
跋　阿茨

偽滿時期文學作品叢書之四

老总短篇集　慈燈

目錄

山中　一
絨料　六
野營與野餐　一三
塡小子　一八
禁閉　二六
雪夜　三三
登了篇稿的人　四〇
禁令　四九
夜學校　五七
欺騙　七〇
路上　七九
破壞　八九
皮氣大的教官　九三
新戰術　一〇二
往事　一〇七
一枝紙煙　一一六
血的色水　一二四
放大尺　一三二
包雜貨的紙　一四二
父親來的時候　一五二
戰友　一六〇
倒的房子　一七二
梨樹溝　一七六
搶親　一八四
拚命　一八七
激烈的戰鬥　一九一
謝罪　一九五
赴任　二〇五
騎功　二二五

張安的失望　二三九
吉排長　二三八
燒鷄　二四三
我們的旅伴　二四八
閒聊　二五三
灰色的群　二五七
發餉　二七一
妻的命令　二七五
老李　二六〇
同性　二八五
行軍　二八八
狐疑　二九四
回憶　三〇〇
在英國人的地下室　三〇九
前哨　三一七

偽滿時期文學作品叢書之五

兩極　吳瑛

兩極目次
序文　一
新幽靈　一
女叛徒　二三
析　三七
錢四嫂　六一
霧　六九
新坤道　八一
詭　九三
僚塵　一〇七
兩極　一一七
望鄉　一二九
新幽靈論　一～三
兩極論　一～六
後記　一～二

偽滿時期文學作品叢書之六

去故集　秋螢

去故集目次
序　一

暮景　一
春雨　一九
南風　二九
亞當的故事　五三
嫩芽　六一
羔羊　八一
書的故事　一〇三
兩代　一二五
礦坑　一五七
後記　一

偽滿時期文學作品叢書之七

野葡萄　小鬆

目次

野葡萄　一
蒲公英　七五
白欄柵　一五七

偽滿時期文學作品叢書之八

蟹　梅娘

目次

行路難　一
動手術之前　一三
小廣告裏面的故事　二七
陽春小曲　四一
春到人間　五二
蟹　六九

偽滿時期文學作品叢書之九

再恋曲　羅曼

目次

北地戀歌　范瑩（一）
愛妻家　何大剛（一五）
戒指　文卒（二八）
杭州之夜　大衛（四一）
兩個殺者　献良（六〇）
咖啡女　张毅（七四）
懺悔天涯　李北川（一〇八）

藍色的秋愁　　吕諾（一二九）
再戀曲　　吕諾（一五二）
戀獄　　爵青（一八二）

偽滿時期文學作品叢書之十

歸鄉　爵青

目次

喜悦　　七
恶魔　　三三
香妃　　六三
长安幻譚　　八九
歸鄉　　一〇七
遺書　　一三五
戀獄　　一五七

（完）

（本学教授）